

第二十一回學術大会発表要旨

想起過去説を検討する

—野家「物語り論」の二つの問題—

青森中央学院大学 鈴木 克成

本発表は本学大第十九回大会における野家啓一氏の公開講演「八過去の実在と再考」を受け、また東北哲学学会第四十九回大会における筆者研究発表「歴史構成主義を再考する」に引き続き、構成主義的な歴史記述の可能性と問題を問う研究の一環として、野家氏による歴史の「物語り論」が抱える問題を大きく二点に絞って指摘しようとするものである。

問題点を指摘する前に、まず、野家理論の本質を次のように定式化しておきたい。それは過去を、歴史的事実を確定していく際の「探求手続き」、すなわち「探求において証拠と見なす種類のものに照らし」た作業に徹底的に還元することによって、その作業の外に「過去自体」を想定することを禁じるといふものである。

こうした野家理論がかかえる第一の問題は、「過去自体」を退けたはずの「物語り論」の中に「過去自体」が密かに混入されていることである。例えば「知覚できる現在と想起しかできない過去」では「経験の様式が根本的に異なる」とされるが、野家理論によると歴史家が扱うのは「もはやない」過去などではなく、まさに現在目の前に知覚することができる記録や資料であって、その限りで知覚

の対象と本質的な違いはないはずである。理論に内在するこうした不徹底によって、むしろ「物語り論」は過去を過去として捉えることに失敗しているように思われる。

しかし、より大きな第二の問題は、歴史認識の妥当性を間主観性に求めたことである。共通の枠組みをもった専門家集団に依存するしかない自然科学的な認識と違い、歴史的認識における間主観性は、その間主観性の内実を問うことが困難で、歴史認識を極めて恣意的なままに止まらせる。実際、南京問題をはじめとして、歴史家と称する「専門家」たちの間にさえ存在する見解の不一致の現状をどう批判していくのかという原理をもたない。

第三の問題は、第二の問題の延長としての政治的文脈の軽視である。大森三条件で歴史的事実を確定できるとする野家理論は、例えば「神武天皇が虚構だと見なされるにいたった」のが明らかに政治的な文脈においてであることを看過する。過去に関する証言それ自体が、証言として受け入れられるか否かを巡って強い政治性を帯びているのだが、野家理論には既に検討が前提されている想起命題について大森三条件に叶うか否かを判断できても、ある事柄を検討の対象に取り上げられるか否かを判断する原理が存在しないために、その政治性を乗り越えて取捨を批判することができない。しかし歴史に関して問題となってくるのは、まさに語るか語らないかの取捨の部分ではないか。

本発表では、構成主義的な立場に立って強い影響力をもつ野家理論の問題点を指摘したが、これを踏まえてその乗り越えの道を探る課題が残されている。

人倫性の象徴としての美

—カントにおける美と道德の関係—

筑波大学大学院 千葉 建

批判期のカントにとって、美と道德の関係を問うことは、一方で、それぞれを他に還元されえない自律的なものとして確立するとともに、他方で、両者を何らかの形で橋渡しするような関係のあり方を模索することを意味していた。そのような関係に対する表現を、カントは『判断力批判』第五十九節「人倫性の象徴としての美について」において、「象徴」という言葉のうちに見出ししている。そこで、カントにおける美と道德との関係を考察するためには、「人倫性の象徴としての美」と呼ばれる事態を解明することが中心テーマとなる。

その際、ヘルダーの『カリゴネー』におけるカント批判が、その考察の手掛かりを与えてくれる。「象徴」に関するヘルダーのカントに対する態度は、大まかに言えば、一、カントの象徴概念の形式性、抽象性の批判、それに対して、二、象徴関係の歴史性、自然性の強調、の二点にまとめられると思われる。こうしたヘルダーの批判を通して、われわれは、カントが述べている美と人倫性との象徴関係について、「この象徴関係は、経験的なものか、それともア prioriに可能なものなのか」と改めて問うことができるだろう。

カントによれば、象徴は「類比 (Analogie)」を介して理性概念を間接的に描出すると述べられ、その類比における判断力の作用が問題となる。しかし、それを詳細に検討してみると、むしろ次のよう

な疑問が生じてくる。すなわち、先行する理性の先行理解または関心が、象徴するものである直観に関する判断力の反省にまで影響を及ぼしてしまうのではないか、そしてその結果、概念からも関心からも自由な反省を前提する美の判定は、象徴関係に引き入れられることによつて、その自律性を失つてしまうのではないか、という疑問である。

しかし、仔細に検討してみれば、美と道德との関係は、趣味判断が純粹であるのに比例して、美しいものが人倫的に善いものの象徴となることができるという関係にある。しかも、この関係の純粹な形態では、一般的な象徴関係とは異なり、先行する理性の解釈や関心が趣味判断に影響を及ぼすことがなく、趣味判断は自由により自律性を保つたまま、道德的判断との間で形式上の類似性を介して象徴関係を表現していると考えられる。

こうして、美と道德の象徴関係は、両判断の構造上の類似性にもとづいて、いわばア prioriに成立するものであるといえるが、しかし、それを可能ならしめる趣味判断の純粹性そのものは、経験的に獲得されなければならないものである。したがって、両者の象徴関係のためには、経験的な場面における、判断力の習慣的な「開化 (Kultur)」を欠かすことはできないと言える。

エマニユエル・レヴィナスにおける存在の意味

筑波大学大学院 村上 太吾

本発表は、エマニユエル・レヴィナスの初期における存在に対する考え方を、そしてそれに関連する形でレヴィナスが考える主体のありかたを、ほぼ同時期に発表された次の二つの著作、「時間と他なるもの」と「実存から実存者へ」に焦点を絞って、彼独特の術語である「イリヤ」という用語から考察することを目的とするものである。

レヴィナスは、自らの出发点が「動詞としての△存在する▽」という観点にあった、と後になって自ら証言している。この証言は、自らの考察の対象が諸々の存在者から切り離された作用としての存在そのものである、という初期のレヴィナスの基本的姿勢を表現しており、レヴィナスのこの姿勢が彼独自の術語としての「イリヤ」に結実している、とわれわれは考える。

われわれはまず、イリヤ *Illya* というフランス語がもつ文法的特徴から考察する。フランス語におけるイリヤ *Illya* という語句はそもそも、「何々がどこそこにある」という非人称構文の中で用いられるものである。「*il*がある」を意味する *il y a* を用いた構文と比較するならば、イリヤ *Illya* 構文は、その当の存在者とイリヤ *Illya* という語句との結びつきが非常に弱いという特徴をもっている。

次いでわれわれは、レヴィナスによる「イリヤ」の術語化の意味を確認する。レヴィナスは「イリヤ」を語る際、あらゆる事物の無への回帰を想像するという「想像的破壊」という手段に訴えるが、

想像上であらゆる事物を破壊してもそこには無は生じず、そこに残るのは「存在する営みそのもの」とされる。この「存在する営みそのもの」と、「イリヤ」とをレヴィナスは等置させる。レヴィナスは「イリヤ」を単独で用い、それを術語化することによって、存在する当のもの、そしてそれが存在する場所が捨象された、「存在する」という純粋な動詞作用を取り出そうとしている。

こうした議論は一見抽象的に見える。がしかしレヴィナスは「イリヤ」を不眠あるいは自殺という事例をもとに考察し、「イリヤ」の性格をその迷れようの無さに求めている。レヴィナスは「イリヤ」の容赦なさを表現し、存在は悪である、というテーゼを提示する。

その上でレヴィナスは、「イリヤ」からの脱出の可能性を考察し、その可能性を主体の成立に求めている。しかし、「イリヤ」からの全面的脱出は、主体の成立によって完全に成就される、とはレヴィナスは考えない。主体の成立は「イリヤ」からの完全な脱出ではなく、「存在する」という動詞的作用である「イリヤ」を部分的に抱え込むことであり、それは同時に否定的価値を負わされている「イリヤ」の部分的な移し替えにしか過ぎず、主体のなかで「イリヤ」は依然として重みを有しているのである。

「今・ここ」の救済とニューエイジ的トレンド

—ブラジル生長の家の受容にみる現代ブラジルの宗教風土の変容—

筑波大学大学院 山田 政信

生長の家は、世界救世教と並んでブラジルで知名度の高い日本産の新宗教である。現地での活動は一九三二年に始まったとされるが、その後二〇年間は目立った布教を行なわなかった。戦後、回教団は、日本人移民と日系ブラジル人に対して「日本人アイデンティティ」の核の一つとなることで日系人コミュニティにおける精神的紐帯としての重要な機能を果たすようになった。そして、一九六〇年代末頃からはブラジル人伝道を積極的に模索しはじめた。

発表者は、一九九九年九月から約半年間にわたってブラジル北東部にあるレシーフェ市で行った調査の結果に基づいて、非日系ブラジル人による生長の家の受容の問題から見えてくる現代ブラジルのいくつかの救済観と宗教風土の変容を考察した。従来の研究では当教団がブラジルで受容されやすい要因に次の点が挙げられてきた。

(1) 生長の家の教義はシンクレティックでキリスト教を正統化する。(2) 原罪の呪縛にとりつかれているキリスト教信者にとって生長の家の「本来罪なし」という教えは魅力的。(3) アラン・カルデック系の心霊主義(カルデシズム)と生長の家のメッセージには共通性がある。発表者は、以上の要因の他に、人びとが生長の家をニューエイジ的なものとして理解していることが当教団の受容に大きく関わっていることを指摘した。

ひとまず発表者は、ニューエイジを日本では精神世界と一般的に呼ばれている領域のことであると理解し、それがブラジルでカトリック教会はもとよりプロテスタントからも危険視されるようになってきていることを指摘した。それらの教会では、日本から進出している新宗教やカルデシズムをニューエイジと同系列に位置づけているが、なかでも生長の家は受容者が多いため批判の対象になりやすい。批判の声は、一九九〇年代半ばから活動が際立つようになったカトリックのカリスマ刷新運動やプロテスタントのネオペンテコスタリズムで良く聞かされている。ブラジル生長の家の受容をニューエイジという枠組みから眺めてみると、現代のブラジルで活発に展開する宗教運動が織りなすダイナミズム、すなわち「今・ここ」の救済次元で競合する姿が浮き彫りになってくる。

先行研究では、異文化進出に成功したと考えられている日本宗教の成功要因を分析するうえで、宗教間の類似性、連続性が指摘される傾向があった。つまり日本宗教の教えと既存文化との間にみられる連続性が特定の宗教の異文化進出を容易にした、という指摘である。それらの分析は連続性を強調するあまり、各宗教が持っている独自性を十分に言及しきれなかったように思われる。発表者は、既存の宗教文化にみられない新しい宗教的ヴィジョンの中にこそ人びとが救済を求めて止まない姿があるという事実を見逃すことなく、そこに一つの宗教風土が変容する力学を探った。

* 創立二十周年記念シンポジウムの内容は、第二十号に掲載いたします。